

新宮山彦ぐるーぶ第1977回

大日岳・大日如来座像台座石組み補強用の砂袋等荷揚げ(2回目)

◇実施日：2018年6月17日(日)曇り

◇参加者：川島 功、沖崎吉信、児嶋道夫、橋本 梓、畑林清子
大江加予子、上村洋司・和美、山川治雄、竹中卓治、
梶野照雄、三井幹雄。 応援者：大谷展郷・脇地真理
(以上新宮市)、岩本信行、中村佳文、中野益男、松田
博行(以上熊野市) 計18名。

今回の砂荷揚げ量は、7kg×1袋、4kg×4袋、16kg、3kg×5袋、15kg、2kg×16袋、32kg、計70kg。

累積砂荷揚げ量は、第1回目10名(5/20)で67kg(瀧本氏の炉端山友会分含む)。菅原・志岐さん分7〜8kg。合計約145kg。

前鬼が標高800m、大日岳が1568mで、その標高差約768mある。空荷でもしんどいところへ、砂を揚げる作業である。当ぐるーぶも会友減と高齢化のなか、前回同様10人の参加が確保出来るか、何キロ荷揚げ可能かで悩んでいた。

そんな中、山川さんから岳友4人が手伝う又、濱野君から大谷、脇地の二人が参加したい申出があったとの連絡を頂き、久々の18名の大人数となった。

前日、五鬼助さんへ「朝8時頃入山する」旨の電話を入れると、この日は昼前頃に入山予定のところ、それではと午前4時に寝屋川市を出て、ゲートを開鍵して下さり感謝である。

小仲坊に18名が揃い代表の挨拶と初参加者の紹介、沖崎から今日の段取と予定等を話し、8時30分少し前、各々が砂袋を背にスタートする。

梶野・橋本氏は、小仲坊宿泊所軒下にストックされている砂・砂利の土嚢袋が劣化して破れているので、新規袋に入れ替えて下さり、川島は砂袋に約3kgを追加。



小仲坊で身支度



本日の作業指示と初参加者紹介



前鬼から太古ノ辻間のこの坂を前田良一著「大峯山秘録」の強力秘録のなかで、この坂は大峯屈指の難路で別名「キンカツギ」という。登りは前を行く男の「キン」をかつき、下りは後から来る男の「キン」かつぐ格好となるとある。

私は、この坂を二回目の徒渉過ぎのいつも休憩する所までを第一ステージ、そこから木段開始までを第二ステージ、二つ岩下を第三ステージ、その上の太古ノ辻迄を第四ステージとイメージしている。

スタートして、各々が担ぐ重さ、体力に差があるが第一ステージで早くも先頭と最後尾の差が長くなる。今日は児嶋さんが作ってくれた木段開始の表示板「853段と100・200の節目のテープの設置があつて、木段開始の一段目で取付けの作業を行う。下へ目をやると大江・畑林・梶野・竹中の4人が下にいる。特に竹中君がしんどそうに見える。木段下に5人が集結。

竹中君は砂2kg袋を6袋、水1.5ℓ外に弁当・雨具などの携行品で17〜18kg位になるだろう。沖崎・畑林・梶野に分散して半分位になったか・・・。二つ岩に着くも先行組みは誰もいない、ここでも「役行者腰掛石」の表示板を設置し小休止。



約8分の地点で小休止



二つ岩で休憩



先行組・太古ノ辻着

太古ノ辻まで6〜7分位の所まで登って来た時、竹中君は前半の重荷の為か、急に腰の痛みを訴える。清ちゃん持参の湿布薬やサロンプラスで応急処置し、残りの荷も沖崎が肩替り。帰りも長い、無理せず太古ノ辻で待つ様様に話をするも、ゆっくりボチボチ行くとのことで行先する。

3時間と少々を要して最終組が大日岳西側鞍部に到着する。



大日岳西側鞍部で昼食

先行組は、炉端山友会が太古ノ辻迄荷揚げしデポした13袋(2〜2.5kg)を手分けして大日岳西側鞍部へザックや手に持って

運び揚げ、最終組が遅れているので大日岳山頂へと砂を担ぎ上げて戻り、鞍部で昼食を大半が済ませて児嶋カフエのコーヒータイム中に最終組が到着する。

昼食を済ませて、各々が順次山頂へ砂等を持って向う。

山頂の作業は、

- ①大日如来坐像を仕上げの為、桧大木と細い桧(右に添えた立木(㊦)梶野氏設置)に単管パイプ(径100mm)を渡して紐で括る。
- ②像上に渡した単管パイプにレバーブロック(吊り機)2個設置し、吊り上げの坐像にザイル廻して固定。



大日岳への登り



像を吊る為の単管パイプを桧立木に括る



レバーブロックで大日如来坐像の吊り上げ



- ③ 坐像の吊り上げ移動と仮安置(石組み横の平地)し、転倒防止の為、ザイルで立木に固定。
- ④ 坐像台座下の土台(基礎部)の石組みの石を撤去。
- ⑤ 水確保の為、容器追加(1個)とシート両整備。
- ⑥ デポの砂・道具の保管。



坐像を吊るザイルを



坐像を吊り上げ



座像を別場所に移動



台座下の石組み掘り起しにより像設置前の護摩木灰在り

6/01、梶野君が単独で単管パイプを揚げてくれていたこと又、吊上げの為、三井さんは入念に計画準備(別紙参照)して頂いた。特にレバーブロックは、超小型なれど一個(機)で250kg迄吊

上げの優れものであった。前述作業も多数の皆さんの参加と事前準備等のお陰で1時間強で作業を終了出来た。又、土台部分から古銭(寛永通宝等)が出てきて護摩供の吊が、その痕跡(炭灰)もあった。



現石組み横の平地に大日如来像を仮安置



作業を終え太古ノ辻へ



二つ岩で本日作業者の記念撮影と小休止



まだまだ課題も多い。
一、安置場所は元のところなのか、少しずらすか。

一、特に土台の石組みの固め方はどうするか。
一、砂、セメント、砂利・栗石は、あとどれ位必要か、荷揚げの段取は。

など等クリアーしなければならぬことは多い。

13時15分頃から下山、15時15分に前鬼・小仲坊着。
五鬼助さんから缶ビールや清涼飲料の接待をして頂いた。



支谷を渡る地点



小仲坊で「ねぎらい」終礼と解散



我々、新宮山彦ぐるーぷも幾多の作業・行事を重ねてきた。その原点は、荷揚げにあると思う。過去もそうだが特に現勢力では、大日如来座像の修復に関わることなど二度とない。

しんどい、きついと感ずるかありがたいことと思うか、気持ちの定めも必要であろう。

岡田雅行(おに雅)もそうであった様に、我々も大峰の黒子である、自慢することもないし、今回の行事も又、常の作業も自身の「行」として取組もうではないか。

今から34年前の昭和59年6月に、持経宿く平治宿間で、雨の中千日刈峰行がスタートした。左記は、その時の玉岡さんの行事報告の抜粋である。

この大峰は、他の山と違って歴史の深い山で、訪れる人々は

山岳宗教の原点を探りに或いは歴史に想いを馳せて歩いているようである。山の道は、大勢の人に踏まれることよって良くなるもので、その導入の役割は我々の目的である。そしてそれは他人の為に役立つことであるが、むしろ自分自身の「行」として取組んでいきたい。

南は本宮から北は太古ノ辻までの繁った部分の刈りあらしを千日刈峰行になぞらえて、私達は千日刈峰行と名づけた。

おそらく延千日で見事に由緒ある道によみがえり、私達も満願を果たした心境に達するであろう。

中略、山を愛し自然の摂理を理解しようとする山彦の同士は、それを実行に移していかうではないか、千日刈峰行をみんなの協力で成功させたい。

行動タイム

前鬼林道ゲート8:02↓8:10前鬼・小仲坊8:30↓9:45ニツ岩
10:00↓10:40太古ノ辻↓11:00大日岳西側鞍部(各自、大日岳に
砂荷揚げ後戻り昼食。尚、後発組は11:25着)11:50↓12:00大日
岳(作業)13:15↓13:35太古ノ辻13:40↓14:05ニツ岩14:15↓
15:15前鬼・小仲坊15:35。

(記：沖崎、写真：梶野・川島)

